



# ぴっぴだより

No.2 2020.5.8

黄色いタントはぴっぴまでの道のりを6年間走り続けました。2人の男の子を後部座席に乗せて。そして、2020年春。黄色いタントは今もその道を走っています。後部座席は空っぽになりましたが。

母としてぴっぴに6年間関わった後、この春からスタッフとしてぴっぴに関わらせていただいています。

2013年、長男がぴっぴに入園しました。長男2才8か月の頃です。次男はその頃生後4か月。いつも、スリングの中で眠っていました。

その頃のぴっぴには何もありませんでした。トイレもキッチンも、ぴっぴハウスも。ぴっぴにあったのは、うっそうとした森、人数分の切り株、寄り添ってくれる大人の存在でした。入園する前は、ぴっぴの場所もどこになるのかわからない状態で、3つの森や田んぼを使わせてもらうこと、日替わりで3つのフィールドで過ごすことになっていました。

それでも、なぜか、ぴっぴに入園させたいと強く思っていました。

フィールドがどこであろうと、寄り添ってくれる大人と仲間がそこにいれば、子どもは育つと信じていたからだと思います。

私自身は幼稚園教諭として、東村山市の私立幼稚園で4年ほど勤めていました。そこでの保育は、大人が決めたカリキュラムが幾つもあって、その中で子どもたちが過ごすのが主でした。答えは大人が持っていて、その答えを子どもたちが探りながら保育者とかかわる。大人のジャッジが基本にあって、子どもたちは、自由な発想、表現を抑えられているように感じていました。10年後20年後、目の前のこの子どもたちは、自分らしく幸せに暮らしているのだろうか？と、悶々と思いつながらの日々でした。

そんな時「里山保育が子どもを変える」というNHKの番組をみました。本当に偶然のことで、その時の私の胸を強くつよく打ちました。

千葉県木更津市の私立保育園で行われている、地元の里山での保育の様子が四季を通してレポートされた1時間ほどの映像でした。

落ちたら川に落ちる、本物の一本橋を渡っていました。

田んぼで泥んこになって遊んでいました。

片道2時間近くかかる山道をリュックサックを背負い歩いていました。

自然の中の危険と隣り合わせで生活していました。

子ども同士は殴り合いのけんかをしていました。

生き物と、日々向き合っていました。

他者を受け入れていました。

大人はその先がどうなるのか、ある程度の予測をしていました。

大人は余計な手出し、口出しはしませんでした。

大人は適度な距離で見守っていました。

13年前のことですが、今でも鮮明に思い出されます。「いつかは、こんな保育ができる場所で子どもと向き合いたい！」そんな情熱が芽生えた瞬間でした。たくさんの縁に恵まれて、森のようちえんぴっぴに出会えました。

何もなかったぴっぴの森は、この6年で凄まじい変化を遂げました。まさに発展途上園だったわけですね。

先述で、『何も無い』と述べましたが、考え方によっては、『造り出せる』状況にありました。日々、大人は森を作ることに、一生懸命でした。そんな大人の姿を見て、子どもは遊びをつくる事に一生懸命でした。うっそうとしていた森はみるみる変化していきました。獣道だったところを何度も踏み固めることで、小道になり、腐った木を倒して広場ができました。すると困ったことも出てきました。地面が踏み固められ過ぎて、植物が生えてこられなくなってしまったのです。その都度、出てきた問題を考えていました。当時のスタッフの姿はとても印象深く記憶に残っています。(子どもアパート西側と、ネット前の保護エリアはそのためです)トイレとキッチンが建ち、小さなログハウスが建ち、物置小屋が作られ、スタッフ駐車場には砂利が敷かれていきました。

物が無いぴっぴではあったけれど、自然の中の物は今と変わらずにそこにあって、その自然物をとてもよく遊びに取り入れていました。感心するほどに。

私たちの周りには、たくさんの物が溢れています。ぴっぴの在り方をみて、『物はそんなに多くなくていいのだ』と学びましたし、そちらのほうがつくりだす事を大切にしたい私には好都合な事が多くありました。

この連休には庭の落ち葉と、米ぬかを利用して腐葉土づくりと、池づくり、マスクづくり、子どもたちとおやつづくりに精を出しました。

つくことは、人間の軸にあることだと思っていて、0からでも1からでもどこからでもいいのだけれど、試行錯誤しながら、つくりだす事にこそ生きる意味があるのだと、ワクワクします。

こんな不安定な世の中ではあるけれど、日々の暮らしを、少ない物の中で、どう過ごしていくか、じっくりとワクワクを大切に、過ごしていきたいものです。

20年後ぴっぴの子どもたちがどうか自分らしく幸せで過ごせていますようにと願いながら。

中村沙耶香

木のひろく

Sketch book

5月



ある日、見ると早春の森を音で歩いていると、胸の高さにおや?丸いもの、近づいてみるとそう、それは昨日イタワれた、古いメジロの巣

葉はわさわわといくと、メジロの鳴き声。昔の人たちはその鳴き声を「十兵衛、口はしと羽とイタワれたかと思ふ」と、本当に感じています。3月頃、メジロ、カラス、ハトなど、鳥たちの巣作りを始め、6月、梅雨の前くらいまで、鳥の巣は基本、卵をあたため、ヒナを育てるまで、ヒナが巣をでてしまえば、その巣は空っぽになります。変わりに、下のメジロや、ヤマメなど、小動物がねぐらにしたりすることがあります。

一口に、鳥の巣といっても、二に分類したように、住んでいる場所や種類などによって、材料も形もみだりです。エサの巣をみつけたら、その巣の音(ヒコメジロ)あげてしまふので、まん丸の卵形のメジロの巣です。中にはどこから来たか、集めたのだからというくらい、鳥の羽がしきつめてあります。ひひの子どもなら、巣にかけられる(今年には餌もあげてきてくれるでしょうか?)、木の下におかすのぶつは、おかしな感じがする。

今日のTeatime  
ススキ茶  
つきの葉の部分でもある  
ススキ。全国どこにでも  
あります。  
ハーブの世界では  
ホーステールという  
生理痛や不妊症  
の緩和に用います。  
かきわきの葉にも  
豊富に含まれます。  
備にかけません。  
茶に(お茶や  
お料理)の材料に  
\*乾燥 穂の中  
の使用は注意



# 田んぼと火から



## 今年のお米づくり 始まりました

4月16日木曜日、おおきくみの日にお米のたねまきをしました。種は去年の4又穫したお米から残しておいたものです。苗箱に土を入れて、平らにならして、お米の種をパラパラとまいて、その上から土のお布団をかけてまた平らにならしてジョーロで水をあげて... いくつもある行程を分担したり、さいふからさいごまでひとりで作業したり。

おひさまの心土也よいお天気の下無事作業を終えたその苗箱から... 今たくさん可愛い芽が出ています! 少しずつ伸びて苗箱の中が青々としています。今はトンネル状にビニルをかけて寒さや風から守っていますがもう少し大きくなったらビニルを外して外気に直に触れ成長しながら田植えのときを待ちます。

まもなく田んぼに水がはられ、空をうっし風の重みを見せてくれる水金鏡のように... そして苗が植えられ緑がよよよとしそれがまた成長し... 変化していく様子を手をかけながらもかけすぎず(お米の自分で成長する力を信じながら)みんなで見守り開花していけたら幸せです。今年もよろしくお祈りします。去年植えた火畑の苺も花が咲いています! びびの苺も! はるこ